

# 小説の会話文と地の文に見られる 「ようだ」「らしい」のテンス交替

発話主体と発話時の視点から

小野澤佳恵

〔キーワード〕 話し手、語り手、作中人物、発話時、テンス

〔要旨〕

現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形のあり様には、依然として不明な問題も残っている。

ここでは、終止の位置にある「ようだった」「らしかった」が実際に観察できる会話と小説のテキストを考察のための資料として取り上げる。そして、意味の特徴を見ながら、各テキストに「ようだった」「らしかった」が現れる際の、発話主体と発話時の基準軸とに注目しつつ考察することによって、テンス交替のあり様がテキストごとに異なることを明らかにし、次のように結論付ける。

「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様は、特に各テキストにおける発話時の基準軸と関係している。発話時の基準軸に、未来か現在か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じるテキストの場合、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができない。一方、発話時の基準軸に、絶対的な時間的位置付けが生じないテキストの場合、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができる。

## 1. はじめに

現代日本語のモダリティ形式が過去形を持つことは、いくつかの先行研究で指摘され、考察もなされている。しかし、特に、認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形のあり様については、依然として不明な問題も残っている。

モダリティに過去形が存在することについて、日本語記述文法研究会（2003）では、「モダリティの意味的な要件」という点から述べている。その要件とは「話し手の発話時における心的態度」であるが、モダリティの過去形は、「形式は話し手の心的態度を満たしてはいるものの、発話時という要件を満たしていない」という指摘に止まっている。

そして、「描出話法」という考え方で、三人称小説の地の文におけるモダリティの過去形を取り上げたのが工藤（1995）である。「描出話法」とは、「内的独白」としての本来的現在形を、過去形に変えるという文体的技巧」であり、「非過去形と過去形とは、視点の相違として対立する」と工藤（1995）は言う。しかし、工藤（1995）では、三人称小説の地の文以外の

テキストに現れるモダリティの過去形については言及していない。また、三人称小説の地の文に現れるモダリティの過去形全てが一様に「描出話法」と言い切れるかどうかについても不明である。

認識的モダリティの各種過去形式についてもう一步進んで考察を行っている庵(2006)では、「らしかった」の「た」は「通常の過去」を表すと言うが、なぜ「らしかった」は日常会話では使われにくく、「ようだった」は日常会話でも使用されるのか説明がない。

そこでここでは、現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形について、テンス交替という観点からあり様を探り、それがテキストごとに異なることを明らかにしたい。考察のための資料としては、終止の位置にある「ようだった」「らしかった」が実際に観察できる会話と小説のテキストを取り上げる。そして、意味の特徴を見ながら、各テキストに「ようだった」「らしかった」が現れる際の、発話主体と発話時の基準軸とに注目しつつ考察することによって、テンス交替のあり様を明らかにする。

## 2. 「ようだ」「らしい」の意味分類

分析では「ようだった」「らしかった」それぞれの意味の特徴についても見ていく。そのた

表1 「ようだ」「らしい」の意味用法の分類

意味用法	特徴	ようだ	らしい
I 知覚で捉えた様子を非現実的に描写する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ようだ」の用法で、「らしい」にはない。</li> <li>・「まるで」「あたかも」と共起しうる。</li> <li>・Nのよう～、Vかのよう～という形式をとる。</li> </ul>		×
例(1) 太郎の発言は、 <u>まるで自分には何も責任がないかのようだ</u> 。			
II 知覚で捉えた様子を表す。 A 知覚で捉えた様子そのものを描写する。 B 知覚で捉えたことに基づいて判断した様子を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ようだ」の用法で、「らしい」にはない。</li> <li>・Aでは、「その様子は」を補える。</li> <li>・Bでは、「どうやら、どうも……様子」と言い換えられる。</li> </ul>		×
Aの例(2) 二年ぶりに父と会った。見ると短めの髪には白髪が交じり、顔には皺が増えた <u>ようだ</u> 。 Bの例(3) 今まで繰り返し説明してきたのに、この人は <u>どうやら</u> 、何をすべきか全然分かっていない <u>ようだ</u> 。			
III 知覚で捉えた状況を証拠として推測を加えた結果、そうと判断される別の事態の成立を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的には、「らしい」の用法であるが、「ようだ」に置き換えることもできる。</li> <li>・「どうやら」「どうも」と共起しうる。</li> </ul>		
例(4) 山田先生が研究室の鍵を掛けていらっしやる。 <u>どうやら</u> 先生は授業に行かれる{らしい/ようだ}			
IV 伝聞情報や判断結果に基づいて、未知の事柄を推測する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「らしい」の用法で、「ようだ」にはない。</li> <li>・伝聞情報や判断結果に基づいていることを示す語句と共起しうる。</li> <li>・推測しているのが「未知の事柄」であることを示す語句と共起しうる。</li> </ul>	×	
例(5) <u>新聞によると</u> 、出生率が過去最低を記録したらしい。			

め、ここでは、「ようだ」「らしい」の意味と特徴、そして形式の分布について、先行研究をもとに本稿での枠組みをまとめる<sup>(1)</sup>。まとめたものが表1である。表中の「○」は形式がその意味と特徴を持つこと、「×」は持たないことを示す。

「ようだ」が基本的に持つ意味は、表1のⅠとⅡである。Ⅰの、「知覚で捉えた様子を非現実的に描写する」という意味用法を持つ「ようだ」はいわゆる例示や比況とよばれるものであり、知覚で捉えた様子を非現実的なものとして描写する。次に、Ⅱの、「知覚で捉えた様子を表す」という意味用法の「ようだ」であるが、これは、表1のⅡのAの「知覚で捉えた様子そのものを描写する」ものと、Bの「知覚で捉えたことに基づいて判断した様子を述べる」もののように、さらに二つに下位分類される。このⅡのAとBとは、「目の前で見たそのままの様子」を述べるか、「目の前で見た言動から、判断し、目の前に現れていない様子」を述べるかの違いであり、そこには、知覚で捉えているという点で連続性があると考えられる。なお、この、「知覚で捉えた様子を表す」Ⅱの派生的意味として「婉曲」がある。例えば、「どうも、あなたのおっしゃっていることは、私には理解できないようです。」(日本語記述文法研究会2003:165より借用)といったものである。この用法は、先行研究でも指摘されていることであり、ここでは非過去形「ようだ」に「婉曲」の意味用法があることを指摘するに止めておく。

そして、「らしい」が基本的に持つ意味は、表1のⅢとⅣである。「ようだ」の意味用法にはない、いわゆる伝聞・推量とよばれるⅣの「らしい」は、「伝聞情報や判断結果に基づいて、未知の事柄を推測する」という意味用法を持つ<sup>(2)</sup>。そして、Ⅲの「知覚で捉えた状況を証拠として推測を加えた結果、そうと判断される別の事態の成立を述べる」という意味用法を持つ「らしい」であるが、表1中に、形式の分布を「○」「×」で示した通り、これは「ようだ」に置き換えることもできる。それは、このⅢの「らしい」が表1のⅡのBの「ようだ」と、知覚で捉えているという点で連続しているからである。Ⅲにおける例<sup>(4)</sup>をⅡのBの「知覚で捉えたことに基づいて判断した様子を述べる」という意味用法で解釈すれば、「どうやら山田先生は授業に行かれる様子だ」となる。つまり、話し手が「山田先生が研究室の鍵を掛けている」のを目の前で「見て」判断し、「山田先生は授業に行かれる」と様子を述べている、と言える。このように、Ⅲの「知覚で捉えた状況を証拠として推測を加えた結果、そうと判断される別の事態の成立を述べる」という意味用法を持つ「らしい」と連続するⅡのBの「ようだ」が現れるのは、知覚で捉えられた状況とそこから判断されることが明確に分化していないと捉えられる場合であると考えられる。よって、Ⅲの「らしい」は、知覚で捉えた状況とそこから判断される事態とが明確に分化しているのが特徴であるが、知覚で捉えた状況とそこから判断される事態とが分化していないと捉えられる場合、「ようだ」に置き換えられる。

### 3. 会話のテキストにおける「ようだった」「らしかった」

ここでは会話のテキストを見る。分析の対象とするのは小説の会話文である。フィクションにおける話し言葉ではあるが、現実の話し言葉と同じく、発話行為の場へ直接的・具体的に關係づけられている。

それでは、まず会話のテキストにおける「ようだった」のあり様について見たい。

- (6) 「今朝老人たちが僕の部屋の前で穴を掘っていた。何を埋めるための穴かはわからないけれど、とても大きな穴だった。僕は彼らのシャベルの音で目が覚めたんだ。それはまるで、僕の頭の中に穴を①掘っているようだった{① \*掘っているようだ}。雪が降ってその穴を埋めた」
- 「他には？」

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

2. の表1のⅠの意味を持つ、この(6)の①「まるで、僕の頭の中に穴を掘っているようだった。」を、(6)の①のように非過去形に置き換えることはできない。それはなぜであろうか。

(6)では、話し手である「僕」が、「他には？」と問う話し相手と会話をしている、その発話の現在を基準軸として、それより過去の時点にあたる「今朝」の出来事を話題にしている。その過去の時点の「今朝」、「僕」が知覚で捉えた「シャベル」で穴を掘る「音」を「僕の頭の中に穴を掘っている」様子として非現実的に描写しているのが(6)の①である。

このように、会話のテキストに出現する「ようだった」は、話し手が過去の時点の知覚で捉えた様子を、非現実的に描写する、もしくは、述べるという意味を持っている。そのため、過去のテンス的意味を持っており、「ようだ」に置き換えられない。

次の例でも確認ができる。

- (7) 「おじいちゃんは？」
- 「眼鏡にかなわなかった」
- 「どうして？」
- 「やくざな商売に手を染めていたしな。刑務所に入ったこともあるんだ。向こうの親は、そのあたりのことも①知っているようだった{① \*知っているようだ}」
- 「でも、その人と一緒になるためだろう」

『世界の中心で、愛をさけぶ』

2. の表1のⅡの意味を持つ、この(7)の①の「知っているようだった」も、過去のテンス的意味を持っているため、非過去形「ようだ」に置き換えられない。(7)の①の「ようだった」では、「話し手」である「おじいちゃん」が孫と会話をしている、その発話の現在を基準軸として、それより過去の時点である「やくざな商売に手を染めていた」時に、知覚で捉えたことに

基づいて判断した「向こうの親」の様子を述べている。そのため、(7)の①のように、「ようだ」に置き換えると、話し手である「おじいちゃん」が孫と会話をしている、その発話の現在の時点に、知覚で捉えた様子を表す意味を持ってしまう。つまり、現在のテンス的意味を持ってしまうため、この(7)の①の「ようだった」は、「ようだ」に置き換えられない。

2. の表1に挙げたように、「ようだ」が基本的に持つ意味は、「知覚で捉えた様子」を表すことである。知覚したのが過去であれば「ようだった」と過去形になり、知覚するのが現在であれば「ようだ」と非過去形になる。このように、知覚で捉えた様子が、非過去か過去かのどの時点であったかを位置付けることが、「ようだ」と「ようだった」の使い分けで可能になると言えよう。

一方、次の(8)(9)(10)の例のように、会話のテキストにおいて「らしかった」の使用は不自然である。

- (8) 「朔太郎は、死んだ人のことを考えると、なんとなく神妙な気持にならないかい」

ぼくは否定もせずに黙っていた。祖父はつづけた。

「死んだ人間にたいして、われらは悪い感情を抱くことができない。利己的になることも、打算的になることもない。人間の成り立ちからして、どうもそういうことに①なっているらしい{① \*なっているらしかった}。試しに、朔太郎が亡くなった彼女にたいして抱く感情を調べてみてごらん。悲しみ、後悔、同情……いまのおまえにとっては辛いものだろうが、けっして悪い感情ではない。悪い感情は一つも含まれていない。(後略)」

『世界の中心で、愛をさけぶ』

- (9) 母親は反応を窺うように顔を上げた。ぼくは黙って頷いた。彼女は大きく息を吐いてつづけた。

「薬のおかげで、悪い細胞はだいぶ①消えてきているらしい{① \*消えているらしかった}わ。先生も一時的に病気は良くなり、退院もできるだろうって。でも一度に全部やっつけてしまうことはできないの。(後略)」

『世界の中心で、愛をさけぶ』

- (10) 「あいつなあ、①死んだらしい{① \*死んだらしかった}よ。今、警察の知り合いに電話したら調べてくれてねえ」

『顔に降りかかる雨』

2. の表1のⅢの意味を持つ(8)①「なっているらしい」も、また、表1のⅣの意味を持つ(9)①「消えているらしい」・(10)①「死んだらしい」も、過去形「らしかった」に置き換えられない。それは、「らしい」が持つ意味と関係がある。2. の表1のⅣに挙げたように、「らしい」

の形式だけが持つ意味は、推測するということである。推測するということは、基本的に、話し手の発話の現在において未知の事柄を推し測ることである。そのため、話し手の発話の現在を基準軸とする会話のテキストでは、非過去の意味を持つ「らしい」が使用されると考える。一方、過去の意味を持つ「らしかった」は、過去形で未知の事柄を推測するということになり、テンス的意味の上で矛盾するため、会話のテキストでは使用しにくくなる。

以上をまとめると次のようになる。

会話のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様

両形とも話し手の発話の現在を基準軸とする、絶対的な時間的位置付けを表す。基本的に非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かで、テンス的意味の対立を示す。そのため、テンス交替ができない。

#### 4. 小説のテキストにおける「ようだった」「らしかった」

つづいて小説のテキストを見る。分析の対象とするのは小説の地の文である。小説は虚構の世界を語り手が語るテキストであるため、日常会話のような現実の話し言葉と異なり、発話行為の場への直接的・具体的な関係づけがないといわれている。

次の(11)は、語り手である「ぼく」が、「アキ」という女の子が白血病で亡くなった時点において、「アキ」が生きていたころの出来事を語っている箇所である。

- (11) ぼくたちが修学旅行から帰ってきたころ、アキには「再生不良性貧血」という病名がついていた。骨髓の働きが弱っているという医者の説明を、彼女は①信じているようだった{① \*信じているようだ}。もちろんぼくにも、疑う理由はなかった。

『世界の中心で、愛をさけぶ』

この(11)の①の「ようだった」は(11)①の「ようだ」に置き換えられない。それは、2.の表1のⅡの意味を持つこの(11)の①の「ようだった」では、語り手である「ぼく」にとっての語りの現在(「アキ」が亡くなった時点)を基準軸として、それより過去の時点である「ぼくたちが修学旅行から帰ってきたころ」に、「ぼく」が知覚で捉えたことに基づいて判断した「アキ」の様子を述べているからである。(11)の①の「ようだ」に置き換えてしまうと、「ぼく」にとっての語りの現在(「アキ」が亡くなった時点)において、知覚で捉えたことに基づいて判断した「アキ」の様子を述べることになってしまうため、置き換えられない。

このように小説のテキストに出現する「ようだった」は、語り手が、語り手にとっての語りの現在を基準軸として、それよりも過去の時点に知覚で捉えた様子を、非現実的に描写する、

もしくは、述べるという意味を持っている。そのため、会話のテキストに出現する「ようだった」と同様、過去のテンス的意味を持っており、「ようだ」に置き換えられない。これは次の例でも確認ができる。

- (12) 「みんな」と彼女は言った。「もっとがんばらなきゃだめだって。しっかりご飯食べて、体力をつけて……吐き気が強くて何も食べられないって言うと、出された薬を飲まないからだって。でも、この吐き気では薬だって飲めない」

そのころにはアキも、自分の病気のことを①知っているようだった{① \* 知っているようだ} 誰が話したわけでもなくとも、本人には②わかってしまうものらしい{② ? わかってしまうものらしかった}

「自分が死ぬなんて、いまでも想像がつかない。それなのに死は、もうすぐ目の前に来ている」

『世界の中心で、愛をさけぶ』

この(12)は、(11)と同じく、語り手である「ぼく」が、「アキ」という女の子が白血病で亡くなった時点において、「アキ」が生きていたころの出来事を語っている部分である。そして、2. の表1のⅡの意味を持つこの(12)の①の「ようだった」も、(11)の①と同様、語り手である「ぼく」が、「ぼく」にとっての語りの現在を基準軸として、それより過去の時点である「そのころ」に、知覚で捉えたことに基づいて判断した「アキ」の、「自分の病気のことを知っている」様子を述べている。そのため、(12)の①の「ようだった」は過去のテンス的意味を持つため、非過去形「ようだ」に置き換えができない。

一方、2. の表1のⅢの意味を持つ(12)の②の「らしい」は、捉え方によって意見が分かれるところであるが、ここでは、「ぼく」にとっての語りの現在（「アキ」が亡くなった時点）に判断される事態を述べていると考える<sup>(3)</sup>。つまり、(12)の①の「ようだった」で表されている過去の時点に知覚で捉えた「アキ」の様子を証拠として、「ぼく」の語りの現在において推測を加えた結果、病気のことは「誰が話したわけでもなくとも、本人にはわかってしまうもの」という判断を述べていると捉える。そのため、(12)の②の「らしい」は非過去のテンス的意味を持つため、②のように過去形「らしかった」に置き換えると不自然であると考え<sup>(4)</sup>。

また、語り手が次の例のような場合がある。

- (13) そしてさらに十時十分、路線バスの終着点である奈良田集落に三軒残っていた留守宅の一軒について、巡回の捜査員から、閉め切った雨戸の隙間から中でテレビがついているような明かりが見える、という情報がPCの無線で入ってきたが、その瞬間「それだ！テレビだ！」と倉田警部補は叫んだのだった。「水沢です！今すぐ立ち入りして下さい！」と続けて怒鳴ったその顔も、隣のもう一人の刑事の顔も、①ほとんど屍蠟のようだった{① \* ほとんど屍蠟のようだ}

『マークスの山』

(13)では、太線部「十時十分」に起こった出来事と、それにかかわる特定の作中人物「合田」と他の人々の様子が語られている。そして、波線部「その瞬間～刑事の顔も」を見ると、特定の作中人物「合田」以外の別の人物が、「合田」や「もう一人の刑事」の「顔」について述べているように感じられる。その、特定の作中人物「合田」以外の別の人物にとっての語りの現在を基準軸として、それより過去の時点である「十時十分」に、その別の人物が知覚で捉えた「合田警部補」や「もう一人の刑事」の「顔」を、「ほとんど屍蠟」の様子として非現実的に描写するのが、2.の表1のIの意味を持つ(13)の①である。これも過去のテンス的意味を持つため、「ようだ」に置き換えることはできない<sup>(5)</sup>。

以上をまとめると次のようになる。

小説のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様 I

両形とも物語の語り手、もしくは、特定の作中人物以外の別の人物が語り手となっている場合、語り手にとっての語りの現在を基準軸とする、絶対的な時間的位置付けを表す。会話のテキストと同じく、非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かで、テンス的意味の対立を示す。そのため、テンス交替ができない<sup>(6)</sup>。

では、次の「ようだった」はどのようなあり様を示しているのだろうか。

(14) 「そうだね。彰子ちゃん、あの時に、女の子のことを話していたことがあったじゃない。ママ、覚えてない？」

ママは①覚えていないようだった{①覚えていないようだ}。バーテンも同様だ。

「どういうことかな？」と本間は訊いた。マキちゃんは彼の肘をやんわりとつかんで寄ってきた。爪が尖っていた。

『火車』

2.の表1のIIの意味を持つ、この(14)の①の「ようだった」は、特定の作中人物である「本間」にとっての出来事時において、つまりは、「ママ、覚えてない？」と「ママ」が「マキちゃん」に尋ねられた時点において、「本間」が知覚で捉えたことに基づいて判断した「ママ」の様子を述べているものである。そして(14)の①の「ようだった」は、(14)の①の「ようだ」に置き換えられる。

次の(15)の①「らしかった」も非過去形「らしい」に置き換えられる。

(15) 「どう猶予ならんのですか」

そう応じた刑事部長は、まだ悠長な厭味を①続けるつもりらしかった{①’



続けるつもりらしい」。

「これ以上、犠牲者を増やすわけにはいかない。決まっているでしょうが！」

検事はヒステリーを爆発させ、「猶予がないというのであれば、警察にこれ以上隠し事はしないでもらいたいですな」と応えて、刑事部長は勝ち誇ったような冷笑を見せた。

一方、官僚たちの片隅でそれを聞かされる合田は、反吐が出そうな嫌悪に駆られて奥歯を噛んだ。

『マークスの山』

2. の表1のⅢの意味を持つ、この(15)の①の「らしかった」は、特定の作中人物である「合田」にとっての出来事時である、「官僚達の片隅」で「刑事部長」や「検事」たちのやり取りを「聞かされ」ている時点において、「合田」が「刑事部長」の「どう猶予なんのですか」という発言を証拠として推測を加えた結果、判断される事態を述べるものである。

このように、(14)の①「ようだった」と(15)の①「らしかった」が、それぞれ、非過去形の(14)①「ようだ」と(15)の①「らしい」に置き換えられるのはなぜであろうか。

小説のテキストでは、虚構の物語を語り手が語る際、語り手にとっての語りの現在を基準軸として、物語（過去の出来事）を語るのが基本である。この場合に、非過去（語り手にとっての語りの現在）か、過去（物語の内容となる過去の出来事）か、といった絶対的位置付けの必要が生じる。しかし、(14)(15)のように、物語の特定の作中人物にとっての出来事時を基準軸として、特定の作中人物がかかわる出来事や特定の作中人物の心情が語られる場合がある。そうした場合には、非過去か過去かといった絶対的位置付けは必要がなくなり、工藤（1995）が言うように、モダリティの非過去形と過去形とは「描出話法」として、視点の相違として対立する。非過去形であれば特定の「作中人物の知覚体験性＝内的視点」として、特定の作中人物の意識の直接的再現がされる。一方、過去形では、「作中人物の意識の対象化＝外的視点化」が起こり、特定の作中人物の意識の直接的再現ではなく、語り手による物語（過去の出来事）の語りに近づく。そしてこのようにテンス的意味の対立がないため、「ようだった」は「ようだ」に、「らしかった」は「らしい」に置き換えられると考える。

また、語り手が物語の特定の作中人物となっている場合がある。

次の(16)の場面は、物語の特定の作中人物となった、高校生の「ぼく」と「アキ」とが授業を受けているところである。(16)は、(11)(12)と異なり、語り手としての「ぼく」が、「アキ」が白血病で亡くなった時点において、「アキ」が生きていたころの出来事を語っていない。(16)の「ぼく」は、物語の語り手として、語りの現在に留まらず、「アキ」が生きていたころの過去の出来事である、物語の中の特定の作中人物となっている。

(16) 作品の背景を説明する教師の話に耳を傾けながら、アキはテキストに目を落

としたまま、いま読み終えたばかりの物語を胸のなかで①反芻しているようだった{①反芻しているようだ}。前髪が垂れて、形のいい鼻梁を覆っている。ぼくは半ば髪に隠れた彼女の耳を見た。また小さくめくれた唇を見た。どれもこれもが、けっして人間の手では引くことができない微妙な線によって形づくられており、じっと眺めていると、それらがすべてアキという一人の少女に収斂していくことが、つくづく不思議な出来事に思えてくる。その美しい人が、ぼくを思ってくれている。

『世界の中心で、愛をさけぶ』

物語の特定の作中人物となった「ぼく」は授業を受ける高校生となり、その出来事時である授業時において、知覚で捉えたことに基づいて判断した「アキ」の様子が(16)の①で述べられている。(14)の①と同様、(16)の①の「ようだった」は過去のテンス的意味を持たないため、(16)の①の「ようだ」に置き換えられる。また(16)の点線部も全て、特定の作中人物となった「ぼく」にとつての、授業時という物語の出来事時における継起性や同時性を表している。

この点を「らしかった」についても確認しておく。次の例(17)は、「私」がある「男」から「成瀬」に関する話を聞いている場面である。

- (17) ほとんど耀子から聞いていた話と同じだった。だが、ナルセモータースの親会社がこういう手合いとは耀子も知らなかつたろう。男がこんな昔の話をするのは、ドジをした成瀬に対する①罰らしかった{①罰らしい}。私は成瀬の顔を見た。成瀬は窓の方を向いている。

『顔に降りかかる雨』

この(17)では、「私」は、(16)の例と同じく、物語の語り手として、語り手にとつての語りの現在に留まらず、ある「男」から「成瀬」に関する話を聞いている物語の特定の作中人物となっている。そのため、2.の表1のⅢの意味を持つ、この(17)の①の「らしかった」では、特定の作中人物となった「私」の、ある「男」から話を聞いている出来事時において、ある「男」が話す「昔の話」を証拠として推測を加えた結果、判断される事態を述べる。そのため、この(17)の①の「らしかった」は、語り手である「私」にとつての語りの現在を基準軸として、それよりも過去の時点であるというテンス的意味を持っていない。テンス的意味の対立がないため、「らしかった」は「らしい」に置き換えられる。

次の例(18)も「私」が物語の特定の作中人物となっている。(18)の場面は、物語の特定の作中人物となった「私」が「彼女」の指示通りに行動しようとするところである。

- (18) スーツは仕立ての良いつるつるした生地で、彼女の顔もそれと同じくらいつるつるしていた。女は私の顔をしばらく確認するように眺めてから、私に向かってこっくりと肯いた。どうやらこちらへ来るようにという①合図らしかった

た{①合図らしい} 私は小銭の勘定をあきらめて両手をポケットから出し、エレベーターの外に出た。

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

(17)の①の「らしかった」と同様、2. の表1のⅢの意味を持つ、この(18)の①の「らしい」では、特定の作中人物となった「私」の、「彼女」と向き合う出来事時において、「彼女」が「私」に向けてこっくりと肯いた」ことを証拠として推測を加えた結果、判断される事態（「こちらへ来るように という合図」が出されたこと）を述べる。そのため、この(18)の①の「らしかった」も過去というテンス的意味を持っておらず、(18)の①のように「らしい」に置き換えられる。以上をまとめると次のようになる。

#### 小説のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様Ⅱ

両形は、特定の作中人物、もしくは、語り手が特定の作中人物となった場合、作中人物にとっての出来事時を基準軸とするため、絶対的な時間的位置付けを表さない。そのため、非過去形と過去形とは視点の相違として対立しており、非過去形であれば特定の作中人物の意識の直接的再現がされるが、過去形では、作中人物の意識の対象化が起こる。よって、会話のテキストと異なり、非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かのテンス的意味の対立をしない。したがって、テンス交替ができる。

## 5. まとめ

以上の考察から、現代日本語の認識的モダリティの「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様が、テキストごとに異なることを明らかにした。それらを図に示したのが表2である。表2に示した通り、テンス交替のあり様は、発話主体と発話時の基準軸と大きく関係している。

表2の①と②のテキストでは、非過去か過去かでテンス的意味の対立があるため、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができない。その場合、①と②のテキストでは、発話時の基準軸に、未来か現在か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じるという類似点が見られる。しかし表2の③のテキストでは、非過去か過去かでテンス的意味の対立がないため、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができる。その場合、③のテキストの発話時の基準軸には、未来か現在か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じない。そのため、表2の③のテキストは、①・②のテキストと発話時の基準軸に相違点があり、テキスト間の特徴には隔たりがあるといえる。

今後は、会話や小説だけでなく、発話主体と発話時の基準軸という観点から、会話と小説との中間に位置すると考えられる新聞のテキストを取り上げ、そこに特有の「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様をも考察したい。本稿における枠組みをさらに精緻なものにし、過去形

を持つ他のモダリティ形式のテンス交替のあり様についても分析していきたい。

表2 「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様とテキストとの関係

	テキスト	発話主体		発話時の基準軸	「ようだ」「らしい」のテンス交替	テンス的意味の対立
①	会話文	話し手		話し手にとっての発話の現在	不可	あり
②	地の文	虚構	・語り手 ・特定の作中人物以外の別の人物が語り手となっている場合	語り手にとっての語りの現在		
③	地の文	虚構	・特定の作中人物 ・語り手が特定の作中人物となっている場合	作中人物にとっての物語の出来事時	可	なし

〔注〕

- <sup>(1)</sup> 菊地康人(2000)、日本語記述文法研究会(2003)、宮崎和人(2002)で提示されている「ようだ」および「らしい」の理論的枠組みを参考にした。
- <sup>(2)</sup> 本稿では今回、「ようだ」「らしい」の意味特徴について上記注(1)の先行研究をもとに枠組みをまとめ、結果、表1のⅣの「伝聞情報や判断結果に基づいて、未知の事柄を推測する」意味用法は「らしい」の形式だけが持つとした。しかしながら、「それはそうと街で君の影の話を耳にしたよ」と大佐はパンでシチューの残りをすくいとりながら言った。「話によれば君の影はずいぶん元気をなくしてあるようだ。口にしたものはあらかた吐いてしまって、地下のベッドに三日も寝たきりらしい。もう長くはないかもしれん。(後略)」(『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)このように、「話によれば」という伝聞情報に基づいて、「君の影はずいぶん元気をなくしてある」という推測を述べる形式として「ようだ」が現れている。この点については、今後、本稿での「ようだ」「らしい」の意味特徴の枠組みを捉え直し、明らかにしたい。
- <sup>(3)</sup> 物語の語り手である「ぼく」が、語りの現在に留まらず、「アキ」が生きていた過去の時点である「そのころ」に、「アキ」と会話をしている物語の特定の作中人物となっていると捉えた場合、作中人物にとっての出来事時を基準軸とするため、<sup>(2)</sup>の②の「わかってしまうものらしい」は絶対的な時間的位置付けを表さないと考えられる。そのとき、②の「わかってしまうものらしかった」と置き換えができる。
- <sup>(4)</sup> ただし、今回採取した用例の中で、語り手が、語り手にとっての語りの現在を基準軸として、「らしい」で推測を述べる用例と考えられるものは、この<sup>(2)</sup>の②の「わかってしまうものらしい」だけであった。
- <sup>(5)</sup> なお、今回採取した用例には、特定の作中人物以外の別の人物にとっての語りの現在を基準軸として、未知の事柄を推測する非過去形「らしい」は現れなかった。また、特定の作中人物以外の別の人物にとっての語りの現在を基準軸とする過去形「らしかった」も見られなかった。
- <sup>(6)</sup> 語り手にとっての語りの現在を基準軸とする小説のテキストでは、会話のテキスト同様に、基本的に非過去の意味を持つ「らしい」が使用されると考えられる。しかしながら、上記の注(3)(4)で述べたように用例数が十分と言えず、今後、裏付けに足る用例数をもとに明らかにしたい。

## 小説の会話文と地の文に見られる「ようだ」「らしい」のテンス交替

### 〔参考文献〕

- 庵功雄 (2006) 「モダリティ形式の夕形に関する一考察」『日本語文法の新地平 2 文論編』くろしお出版
- 奥田靖雄 (1984) 「おしはかり(一)」『日本語学』、3 12  
(1985) 「おしはかり(二)」『日本語学』、4 12
- 菊地康人 (2000) 「『ようだ』と『らしい』 「そうだ」「だろう」との比較も含めて」『国語学』第51巻1号、国語学会
- 工藤浩・仁田義雄・森山卓郎 (2000) 『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史 (1989) 「真性モダリティをもたない文」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
(1991) 『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 野林靖彦 (1999) 「類義のモダリティ形式『ヨウダ』『ラシイ』『ソウダ』 三水準にわたる重層的考察」『国語学』197、国語学会
- 宮崎和人 (2002) 「序章」「第4章 認識のモダリティ」『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版

### 〔用例出典〕

- 片山恭一 (2006) 『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館文庫
- 桐野夏生 (1996) 『顔に降りかかる雨』講談社文庫
- 高村薫 (2003) 『マークスの山』講談社文庫
- 宮部みゆき (1998) 『火車』新潮文庫
- 村上春樹 (1988) 『世界の終わり』ハードボイルド・ワンダーランド』新潮文庫